



Title	さらに憶うガンの恐怖
Author(s)	高羽, 幾造
Citation	癌と人. 1981, 8, p. 7-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

さらに憶うガンの恐怖

理事 高 羽 幾 造*

ガンが不治の病といわれ20世紀においても難病といわれているわけは、第一にガンの発生原因がはっきりしていないからと思われます。同じように都会のきたない空気を吸い、食生活も大いして変らない中年層の人々の中で、どうしてある人はガンにかかり、別の人はかからないのでしょうか。

また、例へば巷間タバコを吸うと肺ガンにかかり易いといわれ、統計的にみてもタバコを吸う人は吸わない人に比べてかかる率が高いといわれています。が、そうかといって、一日に50本も吸うヘビースモーカーでも肺ガンにならない人はいくらでもいるし、反対に吸わない人でも肺ガンになる不幸な人もいる現状からすれば、ガンにかかるのは、当然別の原因があるように思えるのであります。

このため我が国の医学界ではガンの発生原因の究明と駆逐に取組んで、その根絶を目標に日夜にわたっていろいろな研究が推進されているところであります。

さて、その恐ろしいガンによる国民の死亡率は年々高くなり、統計でも死因の第二位を占めると云われておりますが、これはまことに憂慮すべきことで、この現象は国家的にも、また家庭的にもたいへんな脅威であり、大きな損失でもあるといわなければなりません。また、ガンは最近では若年層にまでその觸手をのばす様相を示しており、ガン撲滅の研究はまことに重要問題でありましょうし、なんとしても具現化されてほしいものと考えてるのであります。

私は仕事の関係で多方面に数多くの方々と交友関係をもっておりますが、私の周囲を見渡してもここ数年の間に友人、知人が一人逝きまた一人とガンのために死亡されており、まことに悲しい淋しい現実をひしひしと痛感しているところであります。

知らぬ間にガンのために身体をむしばまれるという、この悲惨さからのがれるためには、やはり自分の身は自分の手で守るための早期発見に真剣にとり組むことが大切であります。然し現状ではその早期発見のためにも集団検診などが実施されている程度のもので、これではどうも満足な結果は得られないと思いますし、一人一人が進んで受診するように心がけねばと思うのであります。

また、私は以前からガンに対する関心は人一倍強くもっておりまして、ガン撲滅に関する運動、または施設などになんらかの形でお役に立ちたい、お手伝いすることが出来ればと願っておりました。

大阪大学微生物病研究所付属病院内にガンに関する早期発見、知識の普及および治療研究ならびに助成活動を主たる目的として、財団法人大阪癌研究会が設立されており、田口院長をはじめ病院あげて熱心にこれを支援され多方面にわたり積極的な活動が続けられている現状に深い感銘を覚えまして、昭和51年6月推されて同会の評議員に、同53年4月理事の末席をけがすこととなりましたが、今後とも運動の推進に一層貢献させていただければと願っておる次第であります。

ガン撲滅の崇高なる大目標に一歩一歩力強く前進、この世からガン消滅という朗報を期待しているところであります。

* 東洋信用金庫理事長